
雨の死神

結城 童

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨の死神

【Nコード】

N6761Y

【作者名】

結城 童

【あらすじ】

アルバイトを探しをしている少年。

富士見慶吾。

彼が、訪れた不思議な探偵事務所。

そこで、彼は不思議な出会いと事件に巻き込まれていく。

そして、雨の死神とも合間見えることになる。

シリアスミステリー。

プロローグ

人は、誰かに依存して生きる。

そんな人たちに、何でも願いの叶う死神が現れたらどうするだろう。

多分、大喜びするだろう。

そう、雨の死神はあなたの心にもいる死神です。

雨の死神

雨の日。

その死神はやってくる。

黒いスーツに身を包み、黒縁の眼鏡をかけ、黒い傘を差し、黒い自転車に乗りやってくる。

黒いバラを胸に添えて。

その死神は、雨の日に決まって現れる。

時間は午前零時丁度。

何でも願いを叶えてくれる。

でも、その願いを叶えるには代償が必要。

それは、人間。

自分の命を差し出すか・・・。

もしくは、他人の命。

あなたの願いはなんですか？

代償を払えるならあなたの元に伺います。

第一章 死神の生贄

2010年 春

とある都内某所高校の入学式。

桜が咲く校舎に生徒達が集まってくる。

見た目は、細く別に顔色が良いようなわけじゃない。

ただ、なんとなく学校に通っている高校生。

この少年から物語は始まっていく。

首藤 進。

高校入学当時から成績は普通であり、友達は少ない。

どこか現実逃避したただ何と無く生きている。

性格は、明るくなくどこか影を持ち、人とも距離を置く。

家族構成は、母と父と3人家族。

いたって普通の家庭で育っていた。

彼が、入学式から1年の日々が過ぎた。

2011年 夏

蒸し暑い、風もない日だった。

現実逃避している日々、声をかけてくる少女。

校則違反の茶髪にピアスの最近の高校生。

「首藤 進くん。」

「ねえ、雨の死神って知ってる？」

クラス全員が静まり返った。

その言葉は、この学校では禁句であった。

少年の心には、焦りと戸惑いが湧き上がる。

「本当にいると思う？」

「さあ……。」

何気ないその言葉は、何故か少年の言葉に響く。

「ちよつと、未来あんたねえ。」

友達の一人が寄ってきた。

「何？」

「タブーだよ、この町じゃそれは。」

未来という少女は、不思議そうに同級生に引つ張られていった。そう、なぜこの町では禁句なのか。

雨の死神。

今では、都市伝説になっている。

でも、現実にはその雨の死神は存在する。

十年前に起きた、大量殺人の原因になったものだ。

今では、誰一人と名前を口にするものはいないはずだった。放課後。

日が沈む頃。

「首藤 進君」

「また・・・か。」

「先はごめん。」

「何で誤る。」

未来は、深々と頭を下げる。

「お父さんがその捜査してるって・・・。」

「犯人を捕まえられない、だだの給料泥棒で言われていること？」

「ごめん。」

「なら、俺には近づかない方がよいよ。」進は、無視して廊下を歩く。

そんな、人に馴染むことのなかった少年だった。

そんな言葉を言ったにもかかわらず、次第に彼女は、いつも僕を追

いかける様になった。

いや、僕が彼女を目で追いかけるようになっていたんだ。

その頃から、彼女のことが好きだったのかもしれない。

それに、一人で一般的な話題から社会問題まで隣で話す。

不思議な少女だった。

そんな日が何日も続き。

ある日、一言喋ってしまった。

「ねえ？コーヒー飴食べる？」

「へえ？」

この合図地が彼が彼女の手のひらで彼が後々踊ることになる。なぜ、合図地を返したか？

それは、コーヒー飴が好きだから。

彼の大好物だ。

一日中、飴をなめていた。

その、合図地から二人は話すようになった。

次第に、彼の周りにも人が集まるようになった。

毎日、何気に生きていた彼に光をくれた彼女。

ある日、進は未来に尋ねた。

俺に何故話しかけたのか？

彼女は、ひとりぼっちでいる彼を見ておもったらしい。

自分に似ている人だと、興味を持ち話しかけた。

本当に純粹で前向きで不思議な子だった。

早崎 未来

当時彼女は、三ヶ月前に転校してきた。

前の高校では、友達もいて普通の高校生活を送っていた。

性格は、明るくって前向きだった。

成績も優秀でクラスでも人気者。

同じような、雰囲気を持った進に話かけた。

突然の親の転勤。

でも、実際は父親のしている事業が失敗して夜逃げしてきた。

家族との中は険悪であり会話も無かったという。

それは、学校側と一部の人間にしか話さないことで。

本当の所、両親の虐待を受けており、児童擁護施設で一時的に孤児院で暮らしているという。

「何で、そんなこと俺に話すの？」

「あなたの、お母さんが私の市の役員の人だったから。」

その時、母がとても大変な仕事をしていることを進は知った。

母は、いつも親戚中から恥さらし者みたいに思われていた。だが、そんなことしているなんて思ってたなかった。でも、母いい人だということは、進も知っていた。

彼女が本当にこの学校に転校してきた理由は、進がいるから安心。母が、そう未来いったからだ。それが、本当の理由だった。

「本当に、母さんは……。」
進は、母らしいことをしたなと思った。

それから、二人は打ち解けたように話すようになった。彼女の口癖は、「また、髪ぼさぼさ。」

「いいじゃん。」

未来は、進の大切な人になった。

二人は、付き合うようにもなり愛を結ぶことになった。

そして、彼女の過去も知った。今彼女の置かれている状況も。夜、彼の家に泣いて現れることも度々あった。

「進……。」

「どうした？」

「できたみたい……。」

「……？」

「子供……。」

プロポーズもまだなのに……。

彼の心は、そう思った。

「結婚してください。」

未来は、大粒の涙を流した。

二人で、施設の人と両親に報告した。

施設と両親は、大騒ぎしていた。

「俺、働く。」

両親は、その言葉を聞いて何も言わなかった。

なぜなら、進は口に出したことは絶対に曲げないから。でも、条件がついた。

高校卒業して、結婚してくれと。

未来と子供の面倒は、父と母が見るといった。

未来は、その後退学届けを出す準備をしていた。

本当にいつのまにかクラスの中に俺は溶け込んでいた。

ただ、普通に過ごせたら良いと思っていた。

普通の高校生活が送れるだけで。

「あのねえ〜」

クラスが笑ったのは、彼女が笑顔でいたから彼女はクラスのムードメーカーだった。

笑顔が絶えない少女だった。

この時まででは・・・。

2012年 高校二年生の夏

早崎未来は、突如彼女は失踪した。

クラスでも人気者で、ムードメーカーだった彼女が失踪する理由がないということ、当初の捜査としては、誘拐として捜査されたが彼女の最後の携帯の着信に雨の死神と登録があった。

雨の死神の教団が再復活し雨の死神の復活祭として、未来は雨の死神の生贄となった。

その後、両親からの被害届はせず、警察も捜査を続行できずきた。これが、のちにいう雨の死神復活事件。

クラスの誰もが、未来の事を口にしなくなった。

早崎未来のことを口にしたものは、のけ者にされた。

俺もその一人だ。

それに、進は容疑者として疑われ生徒からもけ者にされた。

平成2013年 春

また、春の季節がやってきた。

早崎未来は、忘れ去られた存在となり、世界も世間も何も知らない。雨の死神は、大切な人々を皆奪っていく。

卒業式でも彼女の名前は、挙げられなかった。

でも、彼女が座っていた席はあるんだ、教室の片隅に静かに。

彼は、彼女の席に座り外を見た。

何故か、涙が溢れてくる。

「なんで、あの時……一緒になかったんだろっ。」

その言葉は、彼の悲しみを倍増させた。

なあ……、俺は……、何を信じればいい。

見つけ出してやる。

その執念が、彼を突き動かした。

卒業式と同じ日に、進に警察から一本の電話が入り。

生まれて間もない赤ん坊を見せられた。

今度こそまもるよ……。

君を……。

そして、探してみせる未来……。

彼は、卒業して彼女の行方が知りたくてその後、警察官になるため、大学に進学した。

その後、彼はある事件に巻き込まれる。

2014年

毎年、同じ夢をみる。

蒸し暑い、夏俺は同じ夢を見る。

銀色に光る刃物を……。

2024年

首藤 進 33歳

失踪行方不明者執行部所属。

警察官警部。

第二章 雨の死神都市伝説

運命は生まれてくる前から決まっているのだろうか？

好きな人と出会うこと、友達に出会うこと。

生涯一緒に過ごす人、わが子。

両親。

でも、子供は親を選んで生まれてくる。

どこかで、聞いたことがある。

人は、何かの？がりがあり存在す。

人は、一人では生きていけない。

大切な人を守るために生まれてきた。

何か、大きなことをするために生まれてきた。

人には、何か宿命がある。

それは、ともて小さなことかもしれないけれど。

歴史のページにも刻まれないことかもしれない。

しかし、その宿命は存在しなければならぬことだ。

そして、人は何のために生まれてきてその宿命を探すために生まれてくる。

また、その宿命を見つけ出すために生きているのではないか。

最近、ふいに思うときがある。

だが、これは一般論に過ぎない。

この物語も、私の一般論に過ぎない。

だが、あるひとつの希望に向かう物語なのは違くない。

2014年

雨の死神の復活祭の一年後。

またしても、女子高生の失踪事件が起きる。

4月1日 朝7時

森の中でバラバラ死体が発見される。

発見したのは、登山をしていた男性。

第一発見者、森島礼司。

現場遺体は、頭頂部はなく、あったのは両足と上半身のみ

事件現場には、黒いバラと携帯電話にまたしても雨の死神の登録があった。

死亡解剖をした結果、富士田 リエだと判明した。

富士田 リエ17歳

どこにでもいるごく普通の女子高生だった。

授業態度、成績、交友関係も普通。

3ヶ月前に、父親の健太さん母の美紗子の方から捜索願いが出されていた。

まだ、事件は続く。

同じく、母美紗子は娘が発見された翌日失踪した。富士田未砂子56歳、パート、勤務態度は、普通だがただ、従業員からは嫌われていた。

警察は、母親が殺したのではないかと疑われた。原因は、リエの交際していた彼との問題についてだ。しかし、その4週間後母親の全ての遺体が近所の川原から見つかった。

母親の遺体は、首を数十箇所指した後焼かれバラバになった状態だった。

そこで犯人として、当時リエさんと交際していた村上悟郎が監視下におかれた。

その一ヶ月後、今ロッカーの中から赤ん坊と発見されリエさんの下半身が見つかる。

その赤ん坊のDNAを鑑定すると、村上悟郎と富士田リエの子供だと断定。

その赤ん坊は、両親の反対を押しして村上家で育てられることになった。

赤ん坊の名前は、村上成果。

その子供は、村上家で育てられるが、悟郎が目を話した際に、祖父斉敬が暴行し、成果は全治3カ月のやけどと傷を負った。斉敬を逮捕した直後、雨の死神のお告げがあつたとしきりに叫んでいた。

取り調べを行なったところ、富士田リエさん殺害と富士田美紗子さんの殺害を認めた。

孫の将来が心配になった、孫が無事にいるには雨の死神様のお告げを効かなくてはならない。

と取り調べの際に言っていたという。

その後、自宅の家宅捜索の際押入れからリエさんの頭部が見つかった。

村上悟郎さんは、ショックのあまりに事件から2ヶ月後自分の命をたった。

子供の村上成果は、施設に預けられたという。後にこれを死神の御告春女子高生失踪事件という。

しかし、これが終わりではない・・・。

その夏、もつとも恐ろしい事件が起こる。

その前に、雨の死神が世間に広まりつつあった。

元々は、ネットの世界で、どんな願いでも叶えてくれる死神として有名都市伝説だった、出現する条件は、4つ。

- 1、 雨の日。
- 2、 時間は午前零時丁度。
- 3、 代償が必要、自分の命か他人の命。
- 4、 同じく家に黒のバラを飾ること。

この条件を満たした時に雨の死神はあらわれる。

しかし、それは都市伝説として歌われており実際には存在しないものだった。

それは、あちらこちらで増える目撃情報だった。

しかし、そのサイトを利用したものは固く口を閉じ行方をくらしでいた。

2007年からサイト数の需要は増えるが死神は特定の場所にしか現れなかった。

学生たちは噂を信じアクセスをする携帯からアクセスするのは簡単だった。

死神の噂が広まっていき死神の名前である殺人事件が起きた。

2009年 冬

第1死神匿名殺人事件。

被害者、藤本 ユアサ 当時十六歳 高校一年生。

一週間前から行方がわからなくなっており、その二日後。

クラスでも人気者で委員長も務めていて、成績も優秀だった。

誰かに逆恨みされる原因もなかった。

警察に匿名で、殺人動画が送られてきた。
名前は、匿名。

その事件がきっかけで警察も動きだした。
でも、相手はインターネット上に現れては消えてその繰り返しの手。
いつしか、学生たちの周りを越え大人たちの間まで広まっていた。
人は、あるものに依存し生きる。

次第に、雨の死神は神様扱いされていた。

2012年 死神復活祭

2014年 春 死神の御告春女子高生失踪事件

そして、夏。

暑くて熱射病にかかるぐらいの日。

男性が交番に飛び込んできたのが始まりだった。

男性は血まみれで、殺されると言って逃げ込んできた。

都会でもない町で殺人事件が起きる。

被害者十九名以上

十八名死亡 一名、意識不明の重体。

事件を追っていた刑事だった。

首藤 毅

雨の死神の声が聞こえたと言い、周りの無関係な人々をナイフで滅多刺しにしていた。

殺害した後、彼は家に戻り原因は未だにわかっていないが、首がなくなっており、足もなく、死亡していた。

この当時、事故の原因としては、雨の死神は神様となっており、雨の死神という教団も存在した。

首藤は、その教団に所属しており、教団からの命令だったのでないかと推測される。

また、その頃首藤は教団に数千万という資金を教団に借金をして奉仕していた。

妻と息子とは別居中であり、その日は息子が帰ってくるのだと嬉しそうに話していたと言う。

その妻・楓と息子・進も被害者となっており、母親の首藤楓も左足がなくなっており、病院についたが間もなく死亡が確認された。息子の進も右目に重症を負って病院に運ばれた。

その後、首藤進という少年の足取りは分かっていない。

この事件は、雨の死神事件として名がとおりネット上では噂が広まり雨の死神を口にするものはタブーとなっていた。

そして、雨の死神は都市伝説となり今現実の世界に存在し現在にいたる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6761y/>

雨の死神

2012年1月15日03時47分発行